

Contents

特集：小泉新政権の破壊力	1p
<今週の”The Washington Post”から>	
“Maverick set to be Japanese Premier” 「異端児が日本首相に」	8p
<From the Editor> 「困ったプロ筋」	9p

特集：小泉新政権の破壊力

今週24日、自民党総裁選は党本部で開かれた両院議員総会で投開票され、小泉純一郎氏が第20代総裁に選ばれました。25日には党三役を決定、26日に国会で首相指名を受け、きわめて異色な第1次小泉内閣を発足させました。いろいろな意味で、先週までのものの見方を大きく修正しなければならない出来事が進行中です。

本誌が3週連続で同じテーマを取り上げるのは初めてのことですが、これだけの変化を目撃したら放っておけないという気になりました。ということで、今週も国内政治問題です。小泉新政権をどう評価すべきかを考えてみました。

無党派層にアピールした「小泉純一郎の議」

筆者の友人であるジャーナリストがこんなことを書いている¹。

「小泉氏の歴史的役割は、自民党を改革することではなくて、もんどり打って自民党と共に倒れることにある。壊れかけたものを繕っていく姿は想像できない」

一読して「言い得て妙」。国民が小泉総裁に望んでいるのは自民党を立てなおすことではなく、引導を渡すことかもしれない。そして実際にその方が、ご本人の柄にあっていような気もする。自民党総裁選の地方予備選で小泉氏の地滑り的な勝利をもたらしたのは、直接的には自民党員の危機感だが、間接的には無党派層を核とする反・自民意識の高まりである。彼らが望んでいるのは「日本の再生」であって、「自民党の再生」ではない。

¹ 田中裕士"Think About Media" 4月24日分 <http://homepage2.nifty.com/htnk/>

象徴的なのが、今回の総裁選挙で小泉氏をサポートしてきた「小泉純一郎を応援するページ、変革の人」である。² 自民党員ではない、小泉ファンの市民が作った内容を、本人が公認してメッセージを寄せているというユニークなサイトで、4月12日現在で36万件ものアクセスがあった。小泉氏の政策やプロフィール、発言集を宣伝するだけでなく、一般から寄せられた意見に本人が回答した点が他の候補者とは一味違った。

さて、当選後はフロントページに「小泉純一郎さん、総裁選本選にて自民党総裁に選出されました！」という製作者のコメントが寄せられているが、この内容が興味深い。

遂に民意が成就しました。

小泉純一郎さんが自由民主党総裁に選出されました。

私たち一般国民が渴望していた総理大臣が、誕生しようとしています。

政治、経済、社会すべてにおいて、先の見えない日本の現状に、自民党党員の皆さんも気がついたのでしょうか。これからの自民党に期待してもいいかもしれません。

小泉さんはどのように自民党を、そして日本を変えてくれるのでしょうか。

私たちは早急な改革を望んでいます。小泉さんの仕事を楽しみにしています。（下線は筆者）

「自民党党員の皆さんも気がついたのでしょうか」という醒めた書き方に、いかにも無党派層的な心情が顔を覗かせている。言うまでもなく無党派層とは、政治に関心がない人たちではなく、政治に関心があるのにその受け皿を見出せない人たちを意味する。彼らは「先が見えない日本の現状」を憂えているのに、そうした思いを吸収できる政党がない。今回、**彼らが支持したのは小泉個人であって、自民党ではなかった** 4人の候補者のうち小泉氏だけが、「（自民党は）ダメだと思ってないところがダメなんです」（4月12日のニュース番組）と
言うような人であるから、支持を集めたのである。

ところが、このサイトの運営者たちは、自分たちが応援していた候補者が当選したことを素直に喜んでいるとはいえ、それだけでは満足していない。あくまで「早急な改革を望んで」いるのである。小泉首相は自民党の延命装置に過ぎないと彼らを感じたら、おそらくこのサイトは早晩閉鎖されるか、あるいは小泉批判を展開する場に容易に変貌するだろう。

マスコミ各社は今週末に世論調査を実施し、4月30日月曜朝に発表する。就任時の過去最高は細川首相の83.4%、以下、羽田首相の62.1%、橋本首相の58.3%と続く。小泉首相も5割前後の数字が出るだろう。ただし自民党への支持率はそれほど上昇しないはずだ。これまでの支持率は、「自民党は2割だが、森内閣は一桁台」だったが、今度は「自民党は2割のままで、小泉内閣は5割」といった形になるのではないか。

つまり今の小泉現象を支えている「民意」とは、けっして安定したものではない 93年の細川政権はウルグアイラウンド妥結や政治改革のような大仕事を果たしたが、8ヶ月の短命内閣に終わった。95年の青島都政は、都市博中止で脚光を浴びたが、その後はほとんど業績を残せなかった。小泉政権は同様な脆弱性を有していると考えるのが賢明であろう。

² <http://henkaku.jah.ne.jp/index.html>

意外と強力な政治的基盤

とはいうものの、小泉内閣は安定政権になり得る可能性も秘めている。なんとなれば、小泉首相は非常に強力な政治的基盤を有しているからだ。最大派閥である橋本派を敵に回しているのだから、常識的には党内基盤が弱いと見るべきだろう。その反面、小泉氏は「誰の世話にもならず」自民党総裁になった。勝因となったのは彼自身の主張とカリスマ性にあって、利権や資金力や派閥の数といった力を使っていない。もちろん総裁選挙においては、森派が丸ごと小泉候補の支援をしており、組閣も森派が中心となっている。その意味では彼自身も派閥政治の枠内にいる。それでも、下手に手を汚さずに圧倒的な勝ちを得た意味は大きい。**小泉首相は借りを作らずに勝ったために、党内のフリーハンドを得ている**

加藤紘一氏の例を考えると分かりやすい。加藤氏は「橋本派＝平成研」の手を借りればいつでも首相になることができた。たとえば99年9月の自民党総裁選に出馬していなければ、その後のどこかの時点で、伝統的な「経世会と宏池会の連合」による加藤政権が成立していただろう。だが、それでは加藤氏がやりたいことはできない。そこで最大派閥に逆らい続け、昨年末には「加藤の乱」に至ったわけである。

ところが小泉首相は総裁選という壁を正面から大差で突破することで、加藤氏がやろうとしてできなかった体制を築いてしまった。

4月24日総裁選の結果

小泉純一郎	298	
橋本龍太郎	155	
麻生 太郎	31	(* 亀井氏は立候補取り下げ)
過半数	= 243 票	
有効投票数	= 484 票 (投票総数 = 487 票)	

これだけの勝利をもたらした原因は、小泉氏本人の覚悟と迫力にほかならない。それが消えるようであれば、前述のように小泉ブームは短命に終わる。しかし本人が現在のスタンスを続ける限り、国民の期待感は続くだろう。つまるところ、小泉首相の最大の敵は自分自身であって、当人が総裁選で語っていたような覚悟を失ったら、人気は失速して使い捨て内閣となる。本人の覚悟のほどを示した代表的な発言を2つ、以下に引用しておこう。

「今まで、正当な権限を行使しなかった首相が多かったと思う。国民の支持を得て権限を発揮すれば、かなりいろんなことができる。“指導力”の源泉は国民の支持だ」(2001/4/13新聞・通信社合同インタビューにて)

「30年近く議員を務め、過去2回総裁選に出ているが、これが最後の総裁選と覚悟を決めた。失うことを恐れては“しがらみ”から抜けられないが、捨て身で臨めば何でもできる」(2001/4/16 東京・池袋街頭演説会にて)

根本から変化した政治状況

小泉政権が恵まれていることはそれだけではない。仮に目指す改革がうまくいかなくても、首相の失点にはなりにくい。従来の政治の壁が厚いとなれば、国民は「派閥政治はまだまだしぶとい」と思うだろうし、景気の低迷が続くようでも、事前の期待値が低いという利点がある。なにしろ本人は最初から「マイナス成長もあり得る」と言っている。**痛みを伴う改革を実現するのに、こんなに適した内閣はない**といえよう。支持率7%の超不人気内閣のあとに、忽然としてこんなに恵まれた政権が誕生したことは、意外というか、政治のダイナミズムとしかいいようがない。

小泉首相の政敵の側から見ても、この内閣を倒すことは容易でないことが分かる。この政権の政敵となりうるのは、橋本派、その他の党内守旧派、野党、与党内の連立相手、などが考えられる。

橋本派は、派閥の会長（橋本氏）と事務総長（野中氏）の後任が見つからないほどの人材難。102人もいる議員集団が、将来の総裁候補もなく、束ねていく求心力もないという問題に直面している。その一方、7月に控えている参議院選では比例区候補の7割が橋本派なので、小泉人気にあやかりたいという気持ちも強く、当面は様子見となる見込み。

仮に7月の参議院選で自民党が不振だったとしても、「小泉降ろし」は難しい。小泉氏の総裁任期は、森喜朗前総裁の残任期間である9月末まで。その時点で党大会を実施し、あらためて正式な総裁選を行う予定である。だが、**地方予備選で割も取るような相手に戦いを挑もうという候補者が現れるとは考えにくい**。消極的な抵抗はあっても、「小泉降ろし」は「森降ろし」よりも難しいだろう。

野党民主党は今回の事態に茫然自失といったところ。無党派層の風が小泉政権に吹いているのだから、参議院選での勝利さえも怪しくなってきた。「構造改革を優先する」という政策を批判できないので、自民党内の足並みの乱れを攻撃するくらいだが、そうすればますます小泉首相の株が上がってしまう。

自民党と連立を組んできた公明党、保守党は、与党内における影響力を一気に低下させた。連立のパイプ役だった野中元幹事長は失脚同然。新政権は「連立離脱を」という脅しが通じそうな相手でもない。特に公明党は6月24日の東京都議会選挙を控えて、「人気のある首相を敵に回せない」というジレンマがある。

こうしてみると、小泉政権は舵取り次第では長期政権になって、その間に大きな仕事をす
る可能性を秘めているといえる。ただしその障害になりそうな材料も2つある。**ひとつは小泉氏自身の政策の不透明さ、そしてもうひとつは小泉氏周囲も含めた政治運営の不慣れという問題**である。以下、この2つのリスクについて考えてみる。

意外と大雑把な小泉政権の「公約」

「小泉氏は政策の人ではなく、政局の人」という声がある。おそらく正しい評価なのであろう。今回の総裁選挙でも、他の候補に比べると政策論争では細かな部分にはあまり踏み込んでいない。以下は小泉氏の選挙用の所見だが、不用意な部分が少なくない。

自民党が挑むべき「5つの基本方針」（小泉氏の公約）³

【1】自民党の改革と新しい政治システム

- [1] 自民党の悪弊を打破。派閥順送り人事をやめ、若手及び女性を閣僚に登用。
- [2] 衆参両院の候補は、一般公募などによって予備選挙の導入を図る
- [3] 地方党員の声を生かすため、総裁選挙は党員投票を重視する。
- [4] 首相公選制の検討に着手。

【2】経済・産業の改革

- [1] 「緊急経済対策」を実行。2、3年以内に金融、産業の再生の目処をつけ構造改革を進めて景気の回復を図る。
- [2] 一層の規制緩和を推進。雇用対策を充実。
- [3] 科学技術創造立国
- [4] 活力ある中小企業
- [5] 安全で安定した農業

【3】21世紀の外交・安全保障

日米友好関係を外交・安全保障の基軸としつつ、近隣諸国との友好関係と関係改善を図る。

【4】行財政改革

- [1] 財政改革。国債発行の抑制につとめ国、地方を通じた財政健全化を目指す。
- [2] 社会保障改革。年金、医療、介護の3本柱について、「自助と自律」の精神を基本に。
- [3] 行政改革。民間でできることは民間に、地方に任せられることは地方に。
当面は郵政3事業の公社化と郵便事業への民間参入を実現し、さらなる改革を。

【5】社会・教育改革

- [1] 教育改革。日本の歴史、伝統を大切に。
- [2] 環境先進国。循環型社会を目指し、ゴミゼロ社会を目標に。
- [3] 安全な社会。凶悪犯罪を撲滅し、司法改革を進め、日本の「安全神話」を復活させる。

外交・安全保障政策がわずか1行で済まされているのが目立つ。ここで「日米友好関係」という文言が入っているが、おそらく米国の日本ウォッチャーたちはこれを見て焦ったのではないだろうか。日米関係は'Alliance'であり、'Friendship Relationship'などではあり得ない。日本国の首相が「日米同盟」に懐疑的であっては困るのである。（事実、橋本氏、亀井氏は公約のなかで「日米同盟」という言葉を使っている）。

しかし小泉氏は4月22日のNHKでの討論で、集団的自衛権の問題は政府の憲法解釈を見なおすことでクリアできるという見解を示し、日米同盟の重要性を指摘している。どうやら外交・安保政策のブレーンがついて、さりげなく方向転換が行われたようだ。

こうしたアドバイスが適宜行われているうちはいいが、小泉首相自身の政策構想そのものがファジーであるために、方向性ははっきりしていても、具体策のレベルになると議論が迷

³ http://www.jimin.or.jp/jimin/jimin/sousai01/koizumi_ju.html

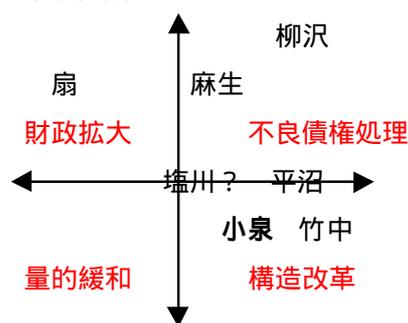
走してしまうリスクがある。

経済政策にも不安

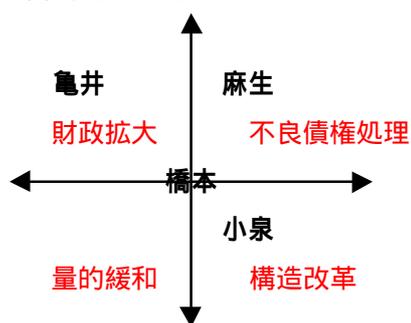
とくに気になるのは経済政策の分野である。現時点では閣僚人事から推測するくらいしかないが、まず柳沢金融担当相、平沼経済産業相、扇国土交通相の3人が留任したのは、不良債権処理問題に関連する3つのポストの継続性ということを考えれば、正しい選択だと思う。金融再生と産業再生はセットで行う必要があるからだ。

しかし塩川財務相、竹中経済財政担当相、麻生政調会長という組み合わせは、いかにも不一致が生じそうな組み合わせである。とくに高齢で金融問題への経験が少ない塩川正太郎財務相の人事は、金融市場に「塩川ショック」をもたらした。なにしろ党三役の経験がない小泉氏は組閣に立ち会った経験がなく、森派の議員たちも森前首相以外はこういった事態には不慣れである。組閣作業は順調ではなかったらしい。

<小泉内閣>



<自民党総裁選>



また、不良債権処理問題について小泉氏自身の認識が楽観的過ぎるように思えることも気にかかる。4月13日、日本経済新聞社の緊急経済対策への対応についてのインタビューで、小泉氏は次のように意思表示を行っている。

- ・証券税制の見直しは今国会にこだわらず。腰をすえて検討
- ・株式買い上げ機構への公的資金投入は、国民の理解を得て判断
- ・公的債務削減は2～3年後に具体的計画を策定

この分では、緊急経済対策の中味は当初の見込みよりも後退しそうだ。ただし現下の経済情勢がそれほど盤石であるとは思われない。同様に、「赤字国債の発行額を年間30兆円以内にとどめる」という公約についても、最初から固定化してしまうと金融不安が発生したときに手の打ちようがなくなってしまう。たとえば金融機関は現在3月末決算の作業中だが、監査法人が決算の承認を拒否するようなことが出てくれば、新たな銀行の破綻があっても少しも不思議ではない。

有事に必要な「異端のリーダー」

小泉政権には、この手の危さがつきまとうことを覚悟しなければならないようだ。それでも小泉首相は旧来の秩序に対する「破壊者」として、さっそく絶大な威力を発揮しつつある。とくに異色の閣僚人事は、従来の永田町の論理を大きく踏み外したものだ。マイナス面はたしかにあるものの、一度こういう「前例」が出来てしまえば、次から再び派閥単位の閣僚人事を行うことは難しくなるだろう。

中曽根元首相が小泉首相を評して「ベンチャー首相」と呼んだ。ご自分はベンチャーの後ろ盾となる「エンジェル」ということなのかもしれないが、この社長はベンチャー企業にふさわしく、独立の気概に満ちた独断専行型のリーダーである。取締役会（連立与党）のコントロールは効きそうにない。加えてビジネスプラン（公約）はあまり明確ではなく、経営スタッフ（閣僚）も軽量級と不安は尽きない。

それでも会社の経営状況は楽観を許さない状況であり、株主（国民）は有事に求められる「異端のリーダー」としての期待をこのベンチャー首相に託しているように見える。株主の間では、過去の経営者に対する不満が強く残っているので、今度の経営者が不確実性の高い経営をしても、しばらくは我慢するだろう。ベンチャー首相は取締役会の抵抗を押さえつつ、思いきった手腕を振るうことで成果を挙げて行くほかはない。とにかく高いパフォーマンスをあげれば、株主は満足なのだから。

さて、ベンチャー首相の今後を占う上で3つのシナリオを想定してみよう。

構造改革シナリオ（40%程度）

小泉政権は高い支持率を武器に経済問題に全力投球。経済状況は悪化しても、求心力を持続。東京都議選（6月）、ジェノバ・サミット、参議院選（7月）、自民党総裁選（9月）などの節目をクリアしつつ長期政権へ。

短命政権シナリオ（40%程度）

過去の高支持率政権と同様に、きびしい現実に直面するとともに支持率が降下。本人の意欲も低下し、参議院選挙で負けて短命政権に終わる。

政党再編シナリオ（20%程度）

夏に向けて予想外の事態が連続し、党内の不満の高まりから自民党は分裂、さらには野党も巻き込んだ再編に至る。

筆者は株主の一人として、このベンチャー首相に大きな期待をかけたいと思う。

< 今週の 'The Washington Post' から >

"Maverick Set to Be Japanese Premier"

April 24th, 2001

「異端児が日本の首相に」

(A01)

*"Maverick"とは、一匹狼とか異端児の意味。変人首相にはぴったりの英語表現があったものですが、ワシントンポスト紙の見方はやや好意的です。

< 要約 >

ウェーブのかかった髪で、一匹狼かたぎのロックファンが日本の首相になる。ポピュリストの暴動が与党の政治マシーンを打破した。小泉純一郎59歳が首相になることは、日本を46年間にわたって支配してきた旧式な派閥政治に弔鐘を鳴らすかもしれない。

「私は自民党を変え、日本を変える」と小泉は紙を見ずに情熱的に語る。明るいグレーのスーツに緑のタイで、党員を前に一礼し、恒例の万歳の音頭を取る。彼が目指す改革を、この国の体制派は神経質に注視している。選挙戦中に彼は不良債権問題に取り組むことを宣言し、向こう1~2年は景気後退かもしれないと述べた。世界経済にとっては憂鬱な話である。

小泉は地方の予備選での勢いに乗り、総裁選を1回目の投票で487票中298票の大差で勝った。「民意が党員を動かし、党員が党を動かしている。今までとまったく逆だ」と語る。

しかし小泉は、自らが反対した派閥の協力なしに公約を実行するという、恐るべき仕事に直面しなければならない。時間はあまりない。7月の参院選で与党が大負ければ辞任を求められる。「彼は孤独で、補佐役がいない。短命に終わるだろう」と森田実は予測する。「大政治家になるか、100日内で終わるか、確率は半々だ」と福岡正行は語る。

経済問題では、小泉は国債の発行を制限することと郵政の民営化を公約している。政治問題では首相公選制と予備選挙を検討するとしている。これらを実行しようとするれば、国会の内外で利益団体と衝突するだろう。早坂茂三は言う。「彼には力がない。選挙の結果、自民党の力の中心が解体してしまった。自民党は混迷時代に入った」。森田はまた、小泉はゴルバチョフのように、党を救うために変化を目指しているが、うまくいかないだろうと言う。

党改革は成功すると見る論者もいる。福岡は「70%の国民が変化を望んでいる」ことを指摘する。こうしたムードが地滑り的な小泉現象を生んだ。2週間前には橋本は十分な支持を集めていたのに、若手議員が派閥の領袖を揺さぶり、党員が議員から選挙を取り戻した。

奇妙なことに、改革者小泉は体制派の出身である。父も祖父も国会議員であり、1972年以来30年も自民党に尽くし、2つの閣僚ポストを得た。しかし彼が得てきた評価は「異端者」である。お金にクリーンだという評判もある。ある友人は、「彼がうちに来るときは弁当箱を持参する」と語る。アウトサイダーのイメージは身だしなみにも至る。多くの政治家が髪を油でなでつけるのに、小泉はグレーの髪を「ベートーベンのように」立てている。女子学生に人気の「X - Japan」のファンでもある。普通の政治家が頻繁にやるような、深夜に及ぶ酒の付き合いはしない。ただし仲間を批判するときには容赦しない直言居士でもある。

<From the Editor > 困ったプロ筋

小泉政権に対する世間の受けは悪くないようですが、困っている人も多々見かけます。

官僚某氏。「思いきって新しいことに挑戦するには今がチャンスだ。しかしどうやったら小泉氏に話をつけられるかが分からない。省内のあらゆるルートをつかっても、本人にたどりつけない。まったく、誰と連絡を取ればいいんだ？」

民主党議員某氏。「構造改革を目指す救国内閣ができれば、何と言って批判すればいいんだろう。このままじゃ参議院選挙もジリ貧だ。それ以上に、当選1~2回の議員を政務官に一本釣りされた日には、めぼしい若手連中がみんな小泉政権に取られてしまうかも」

金融関係某氏。「株式市場は小泉政権を好感していったんは上げたけど、政策の不透明感と塩川ショックで振り出しになってしまった。海外の投資家も戸惑っているが、説明のしようがない。だって本当に先が読めないのだから」

マスコミ某氏。「新首相は当選10回目のベテランだというのに、側近もいなければブレーンもない。なにを考えているかは、本人に聞かないと分からない。経世会だけ見ていれば記事が書けた頃は良かったなあ」

実は今週号の本誌も、新しいニュースが入るたびに書き直しを余儀なくされました。本当に先が読めない政権です。

このように多くの人を切齒扼腕させている小泉首相ですが、気がつけば困っているのはみんなプロの人たちです。このところ、プロばかり相手にするリーダーが続いたところに、今回の地方選で吹き荒れた風の正体がある。この際、プロ筋の人たちはせいぜい困らせることにして、素人のための政治を期待したい新政権です。

* 次週は連休のために本誌をお休みします。次回は5月11日（金）にお送りします。

編集者敬白

- 本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、日商岩井株式会社の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。
〒135-8655 東京都港区台場 2-3-1 <http://www.nisshoiwai.co.jp>
日商岩井ビジネス戦略研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-2183
E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@nisshoiwai.co.jp